【 9 】

氏　　名	黄（コウ）　暁（ギョウ）　芬（フン）
学位(専攻分野)	博　士（文　学）
学位記番号	文　博　第 76 号
学位授与の日付	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科考古学専攻
学位論文題目	前漢墓の研究 ——埋葬施設の伝統と変革に対する考古学的考察——
論文調査委員	（主査）教授 山中一郎　教授 永田英正　教授 上原真人

論文内容の要旨

本論文は，主に埋葬施設の構造型式の変遷に注目して，前漢墓の成立と系譜，成立の思想的背景などを体系的に論じたものである。今世紀に始まった漢墓研究は，1930年代以降本格化し，これまでに発掘調査された漢墓はすでに二万基以上に達する。しかし，個別的な発掘報告や研究，あるいは文献史料との照合による研究は数多いが，漢墓の系譜と変遷を主題とした体系的な研究は少ない。とくに，漢墓を造墓建材の違いによって，木槨墓・空心磚墓・磚室墓などに大別して叙述してきたことが，漢墓研究を羅列的な構造の説明にとどめ，その系譜や変遷を追求する途をはばんでいたと論者は指摘する。

こうした研究の現状を踏まえ，論者は，従来混乱していた用語を整理し（第1章第4節），密閉型原理の槨墓を，槨の組立て方によって，Ⅰ；箱型槨（Ⅰ—1；箱型天板式槨，Ⅰ—2；箱型側板式槨），Ⅱ；間仕切型槨（Ⅱ—1；間仕切型非対称式槨，Ⅱ—2；間仕切型対称式槨，Ⅱ—3；間仕切型上下分層式槨），Ⅲ；槨護型槨の3型6式に分類。一方，開通型原理の室墓を，室を構成する各部分の配置から，Ⅰ；回廊型室（Ⅰ—1；回廊型棺室中位式室，Ⅰ—2；回廊型棺室後位式室），Ⅱ；中軸線配置型室（Ⅱ—1；中軸線配置型横長前堂式室，Ⅱ—2；中軸線配置型前堂後室式室），Ⅲ；単玄室型室の3型6式に分類し（第1章第5節），前漢墓の成立や系譜を検討するための武器としている。

槨墓は龍山文化後期（B. C. 1600年頃）に成立し，商周代に王墓として発展・普及した。その大部分は箱形槨であるが，商代後期に間仕切型槨墓が出現し，春秋戦国期には版築墳丘や陵園建築と結びついて複雑化する。とくに南方の楚墓においては，間仕切型槨墓が発達し，仕切板に装飾の窓や模造門扉を設けて，密閉した槨内に霊魂回遊のための通路が生まれた。これが前漢墓の成立に対してひとつの大きな影響力をもったと，論者は推定する（第2章第4節）。

漢代以前の埋葬施設が，基本的に密閉型原理の槨墓だったのに対し，前漢代には，伝統的な間仕切型槨墓やその周囲に「黄腸題湊」がめぐる槨護型槨墓と並んで，室墓が出現し発達する。論者は大型の室墓を，回廊型室墓・中軸線配置型室墓・単玄室型室墓ごとに，前漢前期（B. C. 206～141年），中期（B. C. 140～

74年），後期（B. C. 73～A. D. 24年）の三時期に分けて具体的に検討し（第3章第1節），その結果，室墓が，

第一段階：間仕切型槨墓や槨護型槨墓が，装飾窓や模造門扉によって槨内の開通を果たした段階。

第二段階：槨護型槨墓に羨道・玄門が出現して，外界との開通を果たし，回廊型室墓が生まれた段階。

第三段階：祭祀空間が発達し，前堂・後室が分離した結果，中軸線配置型室墓が成立した段階。以後，室墓の構造は急速に廟堂邸宅建築を志向する。

という三段階を経て，槨墓から次第に発展したものであると主張する（第3章第2節）。

槨墓から室墓へと段階的変化をたどった大型墓だけでなく，論者の目は，多様な漢墓を構成する各地の中小型墓にも注がれる。中原，長安周辺，華北，長江中流，長江下流，華南の各地域における前漢代の中小型墓を具体的に検討し（第4章第2節），大型墓で提示した槨墓から室墓に至る三段階発展モデルに対して，中小型墓では明確な地域差が存在することを，論者はつきとめる（第4章第3節）。

とくに，槨墓から室墓への第一段階を経た長江中・下流や華南では，第二段階まで室墓は発展したが，少なくとも前漢代には，第三段階への志向が乏しい。これに対し，第一段階が全く存在しない中原や長安周辺では，前漢中期に実用的な玄門が突如出現し，第二段階に移行する。そして，在地的な磚を建材としたアーチ頂で天井空間を拡大するなど，室墓として独自の発展をとげ，第三段階にまで達する。また，華北では，前漢中期まで槨墓だけが存在し，後期には一部の地域で長江中流地域起源の模造門扉をもつ間仕切型槨墓（第一段階）が出現する。一方では，中原地域から磚造の中軸線配置型前堂後室式室墓（第三段階）が波及するなど，華北では各段階すべてが見られるが，室墓が成立する過程を系列的にとらえることはできない。

以上のように，中小型墓では室墓の成立過程に地域差が存在する。しかし，その埋葬施設の構造型式の変遷は，（間仕切型槨墓）→単玄室型室墓→中軸線配置型室墓と基本的にとらえられるので，大型墓における槨護型槨墓→回廊型棺室中位式室墓→回廊型棺室後位式室墓，中軸線配置型室墓という構造型式の変遷と対比した場合，回廊型室墓こそが大型墓を特徴づけ，羨道の有無とともに大型墓と中小型墓とを区別する根拠になると論者は述べている。

以上のように，大型墓をもとに漢墓の成立と系譜を具体的に検証し，中小型墓をもとに前漢墓の地域差を明らかにした論者は，漢墓の特徴である室墓の起源とそれが成立した思想的背景にも考えをめぐらせる。

室墓の起源に関しては，これまで，戦国後期以降に秦で流行した地下式土洞墓が，秦の始皇帝陵の築造を契機に横穴式墓室を生み出したとする洞室墓起源説や，前漢代の典型的な室墓にみるアーチ頂の磚室墓を根拠とする西来説などが存在した。また，近年は，崖墓の出現が室墓の成立を促したとする考えもある。論者は，これら三つの室墓の起源に関する説を検討・批判し，槨墓から室墓が段階的に生み出されたとする論者の主張を改めて補強する（第5章第1節）。

そして，その段階的な変遷，すなわち，槨内の開通→外界との開通→祭祀空間の確保と発達，を促したのは，当時の埋葬理念の変化に違いないという立場に基づき，論者は副葬品の組成にも検討を加える。

春秋戦国期から前漢代にかけて，副葬品は礼器中心から日常生活用具や明器・俑中心のものへと移行した。とくに前漢代には，供献祭祀をシンボル化した倉・竈・井戸の三種の明器の組合せが一般的となる。

さらに，旌幡帛画や画像石などの絵画の題材や，冥界文書の内容に基づいて，こうした副葬品組成の変遷が，被葬者の昇仙を強く祈願したものから，天界・冥界・現世の区別が薄れていくという死生観の変遷，すなわち，中国古来の魂と魄という二元的観念が薄れていったことを反映していると論者は推定する（第5章第2節）。

この二元的死生観をもっともよく表すのが，商周期以来の宗廟と墓という二つの施設だった。宗廟は祖霊＝魂を祀る継続的な儀礼・政治の中心施設で，商周期には都邑の中心部に建てられた。これに対し，墓は死者を埋葬し魄＝鬼を大地に回帰させる施設で，そこでの儀礼は一回限りのものにすぎず，都邑の周辺部に構築された。しかし，春秋期には，墓に墳丘や墓上建築がともなうようになり，秦の始皇帝陵に至って，本来は宗廟建築を構成した寝殿建築が陵園内に作られ，墳墓での継続的な祭祀が定式化した（第5章第3節）。これを背景に成立した室墓は，被葬者と通じる供献祭祀の場を発達させ，父母への葬送行為が儒教の孝の実践につながるという意識のもとに漢代墓制の主流となった（第5章第4節）。

漢代の室墓の普及に中心的役割を果たしたのは，中原地域であった。とくにアーチ頂の磚室墓の完成は，その後の墓制を決定づけ，儒教的理念を背景に各地に波及した。これに対し，長江中流（旧楚地）では，礼制に基づく他界観に現実的イメージを付与した昇仙思想を墓制に強く反映させ，他地域に先んじて槨墓から室墓への移行を果たした。しかし，それは戦国期以前の他界観を引きずったもので，直接には以後の墳墓祭祀を普及させる原動力とはなり得なかった（終章），と論者は結論する。

論文審査の結果の要旨

住居の建築がヒトを他の動物から区別させる顕著な営為であるとすれば，墳墓の構築は精神作用の進化を最高に発達させたヒトが考案した営みであり，ヒトらしさを強く示す事象のひとつである。しかも墳墓は，それを残された人々によって，特別の意識をもって見られ，接せられてきたものであるから，近代考古学が誕生した後にあっても，構築された元の姿をよく保っている一級資料をなしてきた。墳墓は死者を単に葬った所ではない。死者に対するさまざまな観念を伴なって儀礼が執り行われた場所である。そうした儀礼の姿を推定することは，そのときに抱かれていた観念，すなわち墳墓を構築したものの意志を考えさせてくれる。さらには，そうした墳墓が構築された個人についての情報は，その個人が属した社会や，その社会が生み出した文化をも復原させてくれるのである。ここにこそ，墳墓研究が100年以上にわたる考古学研究の主たる分野として位置しつづけてきた理由がある。難しい課題は，言葉を失ってしまった墳墓から，いかにして元来の意味を読み取るかということであろう。

論者は前漢墓を研究の主題に選んだ。前漢期については，文献史料の面からすでに多量で精緻かつ重厚な研究の蓄積がある。一方発掘調査が行われた漢墓は，後漢期のものを含めて，すでに二万基はこえるといわれる。この豊富な考古資料を研究することの意義はきわめて大きいが，広大な地域に分布するとともに，墓の構造も，漢代の高度な技術の産であることを反映して，複雑であり，かつ多様性に富むという難しさがある。したがって1910年代に始まる漢墓研究の進展は著しい成果をもたらせてこなかった。さらに，研究史を整理した論者が，認識期，発展期につづく80年代以降を模索期と名付けるように，60年代から70年代にわたっての研究の実質的中断が中国考古学研究一般におとす大きな影を認めなければならないので

ある。

そうした漢墓研究にあって，論者は第1章で，研究史を踏まえて研究用語の概念を整理するとともに，墳墓構築の使用材に代えて構築法による分類概念をも提示する。死者の埋葬施設として棺を入れるための空間の外枠を構築した後に蓋をして密閉する墓を槨墓とし，一方棺を入れるための空間として玄室が用意され，玄室に外界から至りうる羨道をつなぎ，開閉可能な羨門あるいは，また玄門を設ける構造をもつ墓を室墓とする。槨墓と室墓は，その構造および死者の置き方を規準として，おのおのが3型6式に分類される。さらにこの基本概念のほかにも羨道，墓道などの通路，埋葬空間の平面構造，天井部構築法の分類概念が定義される。1910年代に古代中国の埋葬施設を初めて分類した関野貞に始まる先学の提示した用語概念を，論者の意図する分析のためにまとめたもので，そこでは先行研究の流れが十分に考慮されている。

このように漢墓の構造に対して考古学的な検討を加えるための用語を整備したうえで，280をこえる発掘調査報告から基礎資料を抽出する。まず第2章で前漢期に至る時期の埋葬施設として，商代には槨墓がなされており，春秋戦国期には槨墓の伝統が中原地域を中心に発展していくことを指摘する。西方に起こった秦においては，大型墓は中原の伝統を保持するが，中小型墓には土洞墓が多く営まれる。また南方の楚にあっては，とくに戦国期には，墓域の整然とした配置の仕方や埋葬施設としての槨の平面構造の複雑化などの点で中原地域とは異なった形態が認められるようになる。とくにそこでの槨墓の仕切り板に装飾窓あるいは模造門扉が設けられることを，密閉性原理をもつ槨墓の「開通性」への質的変化の兆しと論者は認める。この評価は楚墓から漢墓への系譜的要素を考える論者の基本的な視点をなすものである。今後の楚墓調査の事例が増加していくなかで，ひとつの意識されるべき問題点となると思われる。

第3章では，漢代以前の埋葬施設が基本的に槨墓であることを認めたうえで，前漢期を3期に分け，大型墓を取り上げる。槨墓および室墓を先に概念を定義した構造型式にまとめ，基本的には槨墓から室墓へと埋葬施設が変わることは通説であるが，その時期を前漢前期後半と確定し，室墓が出現して以後の空間配置パターンの複雑化を葬送の祭祀空間の発達を反映していると解釈する。考古学的な議論としては陳腐ではあるが無理はない。そして論者は無数に存在するともいわれる中小型の漢墓の検討を第4章で取り上げる。地域の伝統的な墳墓造営の意識は，王墓的な大型墓よりも中小型墓により強く残り，地域差を認めるであろうと着目し，その実態を検証する。そしてそうした地域差が解消されて，中小型墓も含めて，典型的な漢墓があまねく認められるようになるのは後漢期になってであると指摘する。広く中国を全土的に見る視野のもとで，前漢墓の系譜と変遷を体系的に論じようとした本論文は，このように考古学的検討のうえで見事に成功している。

槨墓から室墓への段階的発展を先に主張した論者は，第5章でその葬制の変革は漢墓の性格を考えさせるところであるという。副葬品の組成と配置の変化，墓を装飾する絵画の主題の変化，版築墳丘および墓上の祭祀建築物の築造について考察し，墳墓祭祀が繰り広げられたことを指摘したうえで，漢墓を特徴づける室墓は，伝統的思想の変革と儒教的思想の浸透を背景としたものであることを推察する。この第5章は，漢墓の性格を論じようとしたところであるが，文献史料に対して論者が本論文の初めに，「編纂者の立場による史実の選択という偏りは拭い去れない」と主張し，「考古資料に基づいた分析及び実証が必要となるのである」と研究方法を断じた点から考えると，文献史料にはない独自の主張が展開しきれていな

い恨みを残すように思われる。しかしそれは歴史考古学が一般的にもつ問題でもあり，漢代社会の研究を考古学の立場だけから進めるのがいかに難しいかということを浮き彫りにしているのであろう。ここではそのような難問に挑もうとした論者の勇気に敬意を表したい。ともかく前漢墓に関する厖大な考古資料を，いわゆる中国の省壁をこえて，体系的にまとめた成果は，漢代考古学の研究者が参照するべき研究として高く評価することができる。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，平成9年3月3日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事がらについて口頭試問を行った結果，合格と認めた。